



富士山のこと

日本投資者保護基金
理事長

大久保 良夫

真夏でも、都心から富士山が見えることがある。今年の夏、猛暑のなか、写真に撮って外国に住む息子に送ったら、「さすがに山頂の雪もないね。」とコメントが返ってきた。富士の山頂には雪があるのが当然のような気がするが、夏の富士山は黒い肌を青空に晒している。

静岡県に住んでいたころ、発見したことがある。富士山の白雪は、冬になると頂上から徐々に広がってくるのだろうと思っていた。そうではない。秋が深まり、雨が降る。翌朝晴れると、いきなり全体が真白な山になるのである。白い傘のような峰が朝日に輝く。遠くに鳥の群れが飛んでいる。巨大で静寂な空間が突然現れたように感じ、厳粛な気持ちになる。やがて晴れの日が続くと、白いヴェールは裾の方から徐々に消えて小さくなっていく。しかし、雨が降ると、翌朝また真白のヴェールが突然大きく広がる。富士山はこうして冬を迎えるのだ。

日本人は太古の昔から富士山を眺め、崇めてきた。絵に描き、歌に詠み、随筆を書いた。「田子の浦」と詠んだ万葉集の山部赤人。石川丈山の漢詩。太宰治の月見草。北斎の「富嶽三十六景」。横山大観の「霊峰飛鶴」。小学唱歌。どれも日本人には馴染み深い。富士山は外国人も魅了してきた。ラフカディオ・ハーンは、帰国する船上で富士を探している船客に、船頭が「もっと上を、ず

っと上を御覧なさい。」と呼びかける場面を感動的に描いている。英国外交官の夫人キャサリン・サンソムは、富士を「夢であり、詩であり、インスピレーション」と称えた。ブルーノ・タウトも離日直前に見た富士が忘れられない。

そんな富士山好きの私は、新幹線に乗るたびに富士が見えるかどうか、気になってしかたがない。ある時外国人の友人と京都に向かう際、富士が綺麗に見えた。これは見せなくては、と思い、友人の方を見ると、時差で疲れたのか、居眠りをしている。だが、こんな機会はないと、かまわず揺すり起こした。友人はよほど疲れていたのか、驚いた顔をして、またすぐ寝入ってしまったが、あんなに美しい景色はきっと夢だと思っているに違いない。

私が一番好きな富士の歌は、西行の歌である。
「風になびく 富士の煙の 空に消えて
行方もしらぬ 我思ひかな」

平安の頃、富士は煙をたなびかせていたようだ。しかし、富士を見る人の心は永遠に変わらない。

